その善美を盡した宮殿の中では、直ちに次に執るべき行動の計畫に忙はしかつた有樣である。「國家という衣物を纏ふた時に、初めて我が眼を安んじて閉ぢ安眠の床に入ることが出來た」といふのもまた其の訓言の一つである。

かく迄意志の强い人であつたに係はらず、一面にはまた甚だ感情に脆かつた點もうかゞはれる。その母を喪つた時、或は愛子ジハンギールを喪つた時などの嘆き方といへば、實に非常なものである。「王は其の子の死の爲に喪心して、國家の政務を見ることをも全く廢止してしまつた」ので、臣下のものは打ち連れて彼に迫り、「神は人民保護の爲に君主を置いたのに、之れが政を見なければ天下は暗である」といふやうな言葉を以て諫めたので、辛ふじてその元氣を恢復することが出來たと『戰勝記』に見えて居る。其の他孫に當るシャー・ルフ、妃アガに對する愛戀の態度なども、よく彼の感情の方面を示して居るものである。

九　帖木兒に對する評論

凡そ世の毀譽褒貶は如何なる人に向つても一樣でない。その觀察の仕方の相違に因るもので、もとより止むを得ないであらう。帖木兒の如きも昔から賞揚と非難との兩方面から、殆んど擧げ切れない程の評論をうけた人である。善くいふものは先づ偉大なる戰術家と稱し、勇猛の士といひ、寬大の君主といひ、民苦を救ふた王者といひ、惡くいふものは野心家と呼び、殘虐人といひ、壓制家といひ、其の他千種萬樣である。もし公平にいふならば此等のどの批評も皆な當つて居つて、從がつて此等の何れの方面も持つて居た人と云ふべきであらう。今一々その例證を擧げる遑はないが、或時にはいまはしい殘酷な行爲もあつたが、他の時には愛敬すべき寬容な態度もあつた。彼